

目 次

序文 阿部昌樹／櫻村志郎

第1部 社会のなかの法

ネオ・マルクス主義的法モデル再論	船越資晶	3
はじめに	I 相対的自律性 II 正統化 III 価値法則 IV 法意識 おわりに	
川島武宜の戦後——1945～1950年	高橋 裕	19
はじめに	I 軌跡：1945～1950年 II 川島武宜の戦後 III 幫間・有閑・士族 結びにかえて	
法学的身体と裁判の未来	佐藤憲一	53
I 法学の世界と規範的法社会学 II 法学部の文化 III 法学的思考と権威主義 IV 「決まりを守る心」と「損得で動く心」 V 精神と身体 VI 法学的身体 VII 裁判の未来		
児童虐待事件における親の当事者性と手続参加 ——再統合支援のための制度設計に向けて	原田綾子	80
I 本稿の課題 II 日米の虐待法制の比較 行政、司法、親の関係 III 行政と対立する親への支援と司法の役割 強制と参加 IV 制度改革の展望		
婚姻防衛法の検討——合衆国の婚姻概念をめぐる攻防	小泉明子	98
はじめに I DOMAをめぐる訴訟状況 II Windsor v. United States事件 III Windsor 最高裁判決 IV Windsor 判決の論点 むすびにかえて		
刑事施設視察委員制度と市民の司法参加	河合幹雄	115
I 問題の所在 II 改革の経緯と実態 III 立法の背景から見た市民参加 おわりに		

第2部 紛争と紛争処理

法と共約不可能性 ——「被害」のナラティブと権力性をめぐって……	和田仁孝	137
はじめに	I 「被害」の認知的構成	II 分析のための枠組み
支配と抵抗の再帰的關係	III 医療事故における「被害」をめぐる共約不可能性	IV 医療事故における法の位置
		共約不可能性と権力
	V 意味構成過程をめぐる権力への抵抗と帰結	
市民法律相談における法への言及		
——その明示のおよび暗示的諸方法 ……………	櫻村志郎	159
I 問題	II 法的諸活動のエスノメソドロジ的研究	III 相互行為場面としての市民法律相談
		IV 助言供与の諸方法
	V 結論	
痛みと紛争解決 ——たどり着けなさを声で知る ……………	西田英一	184
I 問題の所在	II 痛みは語れるか？	III 声に立ち会う
徹底的な受動性の中で	IV 痛みの声と紛争解決	おわりに
労働紛争当事者の評価構造における公式法の位置		
——労働審判制度利用者調査の労働法社会学的含意 ……………	佐藤岩夫	201
はじめに	I 労働法社会学研究の系譜と本稿の視角	II 労働審判制度利用者調査
		III 労働審判手続をめぐる当事者の評価構造
		むすび：労働関係の「法化」
非専門訴訟における専門的知見の利用と評価		
——セクシュアル・ハラスメント訴訟からの一考察 ……………	渡辺千原	223
はじめに	I セクシュアル・ハラスメント訴訟の展開と専門的知見	II セクシュアル・ハラスメント訴訟における専門的知見と事実認定
		III 事実認定の専門性と物語性
		結びにかえて
地方自治への司法介入		
——神奈川県臨時特例企業税事件を手がかりとして ……………	阿部昌樹	249
I 拒否権プレイヤーとしての裁判所	II 神奈川県臨時特例企業税事件	III 裁判所が拒否権プレイヤーであることの効果

第3部 法専門職の変容

弁護士所得の出生コーホート分析の試み …………… 藤本 亮 273 I 問題の設定 II 分析されるデータと分析の方法 III 世代 別にみた所得水準の推移の分析 IV 相対的低所得層の分析 おわりに	日中企業における弁護士役割比較 …………… 福井康太 298 はじめに I 中国における弁護士の活用状況 II 企業内弁護 士に期待されるタイプと能力・特性 III 企業内弁護士の役割に関 する日中比較 おわりに
本人訴訟の規定要因——『弁護士の地域分布と本人訴訟率』再考 …… 馬場健一 315 I 概要 II 方法論の再吟味 III 再検証 IV 近年の変化 とその背景 まとめ 都市における法化と訴訟利用	対話調停における共約不可能性 …………… 仁木恒夫 335 はじめに I 調停過程の概要 II 主体的な要求の提示と過去 の重力 III 他性に開く非同一的な主体 IV 合意と共約不可能 性 むすびに
あとがき 船越資晶／和田仁孝	